

母さん、頑張れ

青森県
八戸市立吹上小学校 六年

廣瀬 蓮

六月。母さんのお腹が出てきた。ぼくが、「メタボにでもなったの。」

と言うと、

「失礼ね。実は赤ちゃんがいるの。」

と、母さんがいきなり言ってきた。ぼくは、びつくりして、信じられなかった。だって、母さんはもう、三十九才だ。兄さん達は、十八才と、十七才だし、ぼくだって、もう十二才だ。だから、何度も聞き返し、本当だと分かるとうれしくしようがない。

「まだ、あなたと父さんしか知らないの。他の人には言わないですよ。」

と口止めされたが、次の日、親友と先生に教えてしまった。

七月。ぼくは、母さんに質問しまくった。

「いつ、生まれるの。」「十一月十二日ぐらいよ。」「男、女、どっち。」「まだ、分からないよ。」などなど。どちらにしろ、うれしかった。自分の下に、弟か妹ができるんだから。

夏休みになると、母さんはどこから見ても、妊婦体型になった。足がつることがあって、ぼくと父さんが、交代でもんであげた。

七月二十五日の夜中、震度六の地震がきた。あわてて起きると、父さんが「ドアを開けろ。」と言った。ぼくが、開けると、やっと地震がおさまった。床に、物が散乱していた。

「すごい状態だろ。母さん守るので精いっぱいだったからな。」

と父さんが言った。兄ちゃん二人も起きてきて、「母さん大丈夫ぶか。」と声をかけた。家族みんなが、母さんを心配していた。その後、母さんを寝かせて、みんなで片付けた。

そして、九月。母さんのおなかは、前にもつこりでつぱり、歩くのが大変そうだ。でも、年の割には順調らしい。ぼくは、毎日、母さんのおなかで楽しんでる。

「蓮、来て、来て。ここ触ってみて。」

母さんが言ってくる。わき腹を触ると、ドンドンと押してくる。母さんが、

「すごいでしょう。足でけつてるんだよ。あんたもこうだったよ。」

と思い出して言う。ぼくは、「えー、うそだ。」と思ったり、「元気に育ってるんだ。」と喜んだりしている。

ぼくは、十二月を待っている。もう、男か女か分かるらしいが、母さんは、「知りたくない。」と言っている。ぼくは、それもいいなと思う。家族みんなで、新しい命の誕生を待っているんだけど、ぼくにはさらに、うれしいわけがある。ぼくの誕生日が十一月で、赤ちゃんの予定日も十一月だからだ。同じ月だけでもうれしいけど、同じ日だったら奇跡だ。

ともかく、母さんに頑張ってもらいたい。ぼくは、今まで育ててもらって感謝している分、赤ちゃんを大切にしようと思っている。そして、生まれたら、母さんに、「ぼく達の弟妹を生んでくれてありがとう。」と絶対言う。